

雨 夜 閑 談 (3)

鴨 汀 情 人

太 陽 と 月 の 性

獨逸語か佛蘭語を始めて學ぶ人が出遭ふ厄介な困難の一つは名詞の性即ち Geschlecht でありませう。獨逸語で申しますならば、例へば『父』と言ふのを der Vater と申しまして之れは男性です。『母』と言ふのを die Mutter と言つて之れは女性です。又『子供』と言ふのは das Kind でありまして之れは『中性』であります。佛蘭語や伊太利亞語には中性がなく、男性と女性だけであります。例へば伊太利亞語で『父』は il padre 『母』は la madre です。中性がありませんので男の子供は il bambino 女の子供は la bambina であります。然し子供を中性に見るにしても、又男女の子供を別々にわけるにしても、兎に角も上に擧げたやうな例は言葉の性と物の性とが一致して居りますので別に不思議もなく、なるほごうなづかれます。處が此の名詞の性と言ふのは何も物そのものの性をあらはすとは限らないもので、我々が考へて全く性が考へられないやうなものでもやはりその物をあらはす言葉は一つ一つ定まつた性を有してゐるのであります。例へば手近かな例をこつて申しますと鉛筆は der Bleistift で男性、ペンは die Feder で女性、本は das Buch で中性であります。何も鉛筆が男性でペンが女性と言ふ理屈はありませんけれども、そう言ふ性を言葉は各々もつて居るのであります。或は何かそう言ふ感じがあるかもしれません。即ち Sprachgefühl と言ふ奴で、日本語で言語感でせうか。言語感と言ふのは上の言葉の直譯で、日本語には昔はそう言ふ概念はなかつたやうにも思へますが、私の意見では日本にも確かにあつたやうです。その證據には大昔からの言葉で『言葉』(こゝだま)と言ふのがありますが、これなどは Sprachgefühl をよく言ひあらはした言葉ではありますまいか。面白い事には同じ言葉でも性がかはつて意味がかはる事があります。例へば獨逸語で die See と言ふと女性でありまして、これは『海』であります。der See となるるとこれは男性で『湖』に

なります。これなごは私には了解出来ませんが、湖に云ふご何かすごい男性の感じがして海に言ふご何か慈母の様な感じでもするのかもしれませんが。勿論、怒濤荒れ狂ふ所なんかは海も仲々男性的ではありますけれど。

扱て大分前置きが長くなりましたけれど、ごんな言葉でも各々その性をもつてゐる。處で私は『太陽』に『月』に言ふ言葉の性を考へて見たここにあります。所がこれが大變面白いのです。先づ佛蘭語で申しますご太陽は le soleil で男性、月は la lune で女性です。伊太利亞語も同じ事で太陽は il sole 月は la luna であります。なるほご、太陽は男性、月は女性に言ふやうな感じを諸君はするでせう。希臘神話を緒くご、アポロに言ふ神様がありますが、言ふまでもなくこれは男性で太陽の神様。デイアーナに言ふ女神がありますが、之れはお月様です。

所が不思議なここには獨逸語です。獨逸語では御承知の通り太陽は die Sonne で女性、月は der Mond で男性です。

私はこの佛蘭西伊太利亞即羅甸民族の言葉に獨逸語のやうなゲルマン民族の言葉に於ける太陽に月ごの性の相違について次のやうな説明を試みました。これは何も言語學や民族心理學に云ふやうな意味で言ふのではありませんので、餘りむつかしい反對論なごをかつぎ出されては困りますが、私の單なる感じ即ち言靈では、次のやうな説明になります。

即ち獨逸のやうな寒い所にすむ北方民族にごつては太陽はなつかしいやさしい對象物で、寒い凍りつくやうな冬の氷雪が溶けて春になり夏になり段々太陽が近づくに言ふ事は再び戀しい『慈母』でも歸つて來るやうな感じがするでせう。だから太陽は女性にして感ずるでありませう。所が月は、あの獨逸の山嶽や森林の上に凍つたやうに懸つてゐる所を見るに、何だか凄く烈しい感じがするのではないでせうか。即ち地は滿地の雪、空は滿天の月光であれば、これを見るものの心は、何だかひきしまつた感じを呼び起します。だから der Mond は男性に感ぜられるのかも知れません。ノルウエーの小説家ピエルンシエルネ・ピエルンソンの書いたジェノーブ・ゾルバツケンに言ふ小説を讀むに、年中太陽の光を受けたこののない山陰の樅の木の村グランリデンのトルビヨルンに言ふ勇しい若者が、太陽にめぐ

まれた遙かに北の方にある、ゾルバツケンミ言ふ村の美しい女性ジェノーブに戀する話があります。ゾルバツケンミ云ふ言葉は太陽を背にうけるミ言ふ意味でもありませうか。兎に角あんな寒い地方では太陽は慈母ミか戀する優しい女性ミかを代表するやうな感じがします。

然るに佛蘭西や伊太利亞のやうなあたたかい土地に發した南方民族にミつては全く感じが逆であります。佛蘭西や伊太利亞では太陽は赫々ミして夏になれば炎帝の感じがするであります。『烈日の下』ミ言ふやうな言葉があるやうに、もはや慈母や戀人の感じではなくて熱火の男性の感じがするのでありませう。ですから le soleil 或は il sole は男性であります。然るに月ミなるミ、これは靜かな夜の世界を照す優しい女性の感じであります。春の夜の朧月、夏の夜の涼月なミ、なにかそこにはセレナーデでも奏するギタルラのすががきでもふさわしい、又水郷ヴェネチヤのゴンドラに戀を語るにふさわしい、ごう見ても月は女性の感じであります。だから月は la lune 或は la luna で女性でありませう。

勿論此の北方ミ南方のちがいは全く偶然のものであるかも知れません。それに瑞典語や露西亞語をもしらべたわけではありませんのでこの法則が一般に成立するかごうかは知りませんが、然し此の考へも雨夜閑談の話の種ミしては面白いではありませんか。

話はちよつミ別ですが、日本ではおそれ多い事ではありますが

天照大神は太陽を體現御座しますのですが女神に御座します。所が月讀之命ミ申しますミ月の神様ですが男性に御座します。面白い事は我が日本で太陽をつかさどる神様は女性でまします所はゲルマン民族の言靈ミ相通する所があるやうです。

ミころが印度になるミ大日如來なミ言つて太陽は男性、月は何ミ言ふか佛教の事はこんミ知らぬのでわからないが多分女性であらう。恐らく印度のやうなあつい國ではそう言ふ感じがするのでありませう。